

---

# 風来将詩 ~ the another gatriing ~

辛味噌島中

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風来将詩 the another gathering

### 【Nコード】

N26490

### 【作者名】

辛味噌島中

### 【あらすじ】

親が残してくれた畑に妹、それに少しのお金さえあれば明日の夕日は輝かしく見える…

なんて思考の兄が、剣と魔法が飛び交い、異形が闊歩する世界に誤って召還されてしまう。

元の世界に戻るために、そして妹の為に、お兄ちゃんは頑張る…

とくにおおきい。

## #1 さよなら世界（前書き）

作者の作品に出てくる主人公の兄が頑張っちゃっ…

そんなお話です。

## #1 さよなら世界

風が吹く。

それは幸福を呼ぶモノでもあり、また逆に悪しきモノを呼び寄せるモノでもある。

風が吹く。

その風は果たして少年に幸福を呼ぶモノであるのだろうか

「ああもう…畜生!!  
まだ追って来てやがる!!」

「まあ、あれだけやつちやえばね、怒っちゃうのも仕方ないよ。」

初夏のある日。

夏の訪れを感じさせる風が頬を駆ける。

俺は 手塚 将吾。

しがない中学二年生で、同じ学校の一年生に妹がいる。

隣を走る男は 松下<sup>まつした</sup> 慶事<sup>けいじ</sup>。

飲食店を営む父を持っていて、俺の親父と慶事の親父さんは元同級生の仲なのだそうだ。

家が近く、両親とも多忙であつた俺達は、幼い頃から毎日のように遊んでいて今では校内でちよいと名の知れた二人組となっている。（やんちゃな方で）

そして、極度のお人好しでもある。

慶事は俺との関係は親友以上と思っているらしいのだが、お前はどうなのか、と聞かれた時に素直に首を縦に振れないのはそれが原因だ。

校内で名が知れ渡ってしまったのもそう。

こうして殺されまいと死ぬ気で走っているのもそうだ。

と、いうのも。

今日は部活動の顧問が休みということなので、普段よりもかなり早い時間に帰れることになった。

普段、それなりに多忙な俺はこの機会を逃すまいと、激安で知られる隣町のスーパーに向かうことにした。

しかし、そこで同じ部活の慶事が”暇だからついて行く”などとほざきやがった。

正直、その日諸事情で朝食を抜きにしていた為、俺は普段にも増してかなり苛立っていた。

そこに（故意ではないのだろうが）そんなことを切り出されたのだから、たまったものじゃない。

にやけるその顔面に地面の味を教えてやろうと思ったが、あえてそこは踏みとどまった。

そしてスーパーへと向かう道中。

奴から一方的に降りかかってくる会話に適当に相づちをうちながら歩いていると、ビルの間の細い裏道、人二人が並んで歩くと肩が触れ合うような細さの薄暗い道。

そこから細い悲鳴のようなものが聞こえてきた。

それなりに広い道を歩いていたはずだが、今俺達の周りには誰もいない。

何か焦臭いことが起きているのなら、悲鳴を上げた人物を助けられるのは現状では俺達だけだ。

しかし俺は急ぎの身。

見なかった…もとい。

聞かなかったことにしようとした。

何故なら隣にはトラブルメーカーのヤツがいるからだ。

悟られないように、ヤツを睨んでみた。

ああ、ダメだ、コイツ気づいてやる。

こうなってしまうてはマズい。

このままでは厄介事に巻き込まれてしまいかねない。

俺は距離を置くため、ごく自然に歩みを早めた。

しかし。

「なんかマズそうだ…

シヨウ、行ってみよう!!」

「うおお、しまった!

今日はタイムセールの日だった!!

急がねえと…」

「シヨウ!」

歩みを止める。

こうなってしまうてはしかたない。

アイツは怒らせると後が面倒だ。

それに次の日にボロボロのアイツを見るのもバツが悪い気がする。

「…ああ、もう!!」

タイムセールてのはマジなんだからな!?

ちゃっちゃんと済ませてとっどと行くぞ!!」



とびつきりの不満顔を浮かべながら裏道に突っ込んだのがつい15分前。

そこで見たのは数人の不良共にカツアゲされかけている少女だったことにああ、ありきたりだなあ、とつまらなさそうな顔を浮かべたのが10分前。

「あ、ちょ、ちよつと、あなた達！  
お願い、助けてー！」

不良の一人にビルの壁に背中を押し付けられている少女が、こちらに首を向けて叫んだ。

「なんだ、お前ら？  
コイツの知り合いか！？」

不良の一人が此方を向きながら聞いてきた。

「なら話が早い！  
おい、コイツが盗んだ俺達の…」

もう一人の不良が話す言葉は幾度俺の頭には入っていないかった。

何故なら、真横に居たはずの慶事<sup>バカ</sup>がその不良の眉間に右のストリートを決めていたからだ。

ネガティブ系列の考えが頭を巡り始めたのが6分前。

逃げるという最良の選択が頭に浮かんだのはつい5分59秒前だった。

その後、慶事の武力行使によってただでさえ狭苦しい裏道が混沌とした状況になった。

最初は優位にたっていたものの、次第に数に圧倒され実質一人で戦っていた慶事の旗色が悪くなってきた。（俺は巻き込まないように女の子を引つ張り出して後方で防戦をしていた。）

「これ以上はキツいな…

おい、慶事！！

ズラかるぞ！！」

不良の一人を沈めながら慶事がこちらを向く。

「っはあ、はあ、…っ

ちよっと、調子に乗りすぎたかな…」

「ああ、乗りすぎだ。」

慶事の背後に鉄パイプを持った不良が現れた。

（！アイツ、気づいてない）

「おい慶事、伏せろお！！」

駆け出す。

目下に転がる不良を踏み台にして、最高速でジャンプをする。

「眠りなあ！！」

「？…っ！！」

間一髪で鉄パイプをしゃがんでかわす。

ぶおん、と空を切る音が辺りに響いた。

恐らくフルスイングだったのだろう、完全に体制が崩れて無防備な状態になっている。

目標の胸は丸空きだ。

（もらった！）

空中で目一杯脚をたたみ、そして片足だけ思い切り突き出した。ライダーキックというヤツだろう。

「うおりゃあああああ！！」

「しまっ…うおあ！！」

不良の腹部に右足がクリーンヒットする。

劇中の怪人のように吹き飛びはしないものの、この狭い通路の中でかなり体格の大きい不良を行動不能にできた。

撤退準備は完了だ。

「っふう、よし、準備完了だ…！」

おい、慶事、大丈夫か？」

片膝をついて着地しながら、しゃがみこんだ慶事の肩を持ち立ち上がる。

「やあ、シヨウ。  
相変わらずのキックだね。」

肩越しに語りかけてきたものの、無視して一方的にまくし立てる。

「バカ野郎が、またこんな事になっちまったじゃねえかよ…  
もうタイムセールは間に合わん。

責任とれ、なんて言わない。

ただ今日は晩飯お前んとこで食うからな。」

「え、ちょ、それキツイよ  
今日団体さん来るんだよ？」

「翔子も連れててく」

「テラス席フルコース、2名様ご予約承りましたあ」

「外はイヤだ。

虫が多くて適わん」

「店内は人数オーバー…って、痛い痛い痛い痛い！！」

あんまり肩上げないで！

さつきバットで思い切りやられたんだから！！」

「ああ、それはよくごさんしたねえ」。

少しはその神経を俺を巻き込まないことに回せってんだよ、たく…

「!!」

悪態をつきながら慶事を引きずる。

「おおい、その…えと、名前聞いてなかったな。

女の子、待たせてごめ…ん？

ありゃ？」

「誰に話しかけてるのさ？」

逃げるため、慶事を引きずりながら後方で待機させていた少女の下  
に来たはずだったのだが。

「……ヤロウ、さっさと逃げやがった」

シヨウの瞳には先ほど突入してきた通路を此方に背を向けながら走  
る少女が映っていた。

「うわあ、ひょっとして僕ら利用されちゃった感じかな？」

「………おまえが居なけりや事はもつと穩便に運ばれたかもしれな  
いな……」

明日の朝食もお前んとこ決定な。」

「……マジ？」

「マジ。

…さて、あのクソビッチの顔はしかと覚えた。  
通っている中学もおおよそは予想がつく。  
今度あつたら色々と苦痛を与えたいな。

と、いうことで。

おい、充分休んだろ？」

「はぁ…わかってるよ。

逃げるんだろ？」

「そうだ。

走るぞ。」

「まったく、君と一緒にいるといつもこれだ。」

「…それ、マジで言ってるのか？」

「マジで。」

と、言い放つと同時に慶事は駆け出した。

(…早いとこアイツの了見どうにかしないと、つきあわされるこつちが真面目にやばいかもな…)

額に青筋を浮かべながら考えていると、後ろが騒がしくなってきた。

どうやら不良共が障害となっている不良を乗り越えて来たようだ。

「おっと…こりゃ、急がなきゃやばいかもな…」

そう言い残し俺は、前方を走る慶事の背中を追った。

そして現在に至る。

後々になって分かったことだが、あの不良共は全員まとめて（とんでもないことだが）あの少女に財布を摺られていたらしい。

およそ一週間前から被害にあっていたらしく、色々あってやっとこさ犯人を捕まえられたのだそうだ。

しかし、そこに招かれざる客（俺ら）が横槍をいれてしまい、せっかくの機会は水の泡となってしまうたそうな。

ちなみに、およそ三年後、かの少女と俺達は再び出逢うことになるのは別の話。

「くっそ………！  
いい加減諦めろよな………！！」

あれからしばらく。

最初は区々だった追っ手だが、次第にその数を増やしてきた。それに比例するかのように俺達にも疲労が培ってきていた。

「ハア…ハア…いい加減にしてほしいよね…！  
僕も早く帰って料理の仕込み、手伝わなきゃならないのに…！！  
おまけにお遣いも果たせなかったし…！！」

息を荒げながら慶事は悪態をついた。

「お遣い…？」

お前、単に暇なワケじゃなかったのね…！！  
なんで言わなかった……？

つつうおお！？」

問いかけようとしたその瞬間。

後方から妙な風切り音が聞こえ、走りながらとっさに振り返ると、

俺は胸元に忍ばせていた扇子で飛来してきた鉄パイプを叩き落と  
していた。

「…！

大丈夫かい、シヨウ……て、なんだ、その扇子なら大丈夫か。」

「なんだじゃあねえよ！

あつぶねえなあ、殺す気が、連中！

…っ！！

もう一丁！！」

さらに飛来してきた鉄パイプを叩き落とす。



相変わらず妙な扇子だと思った。

この扇子は幼少の、記憶の薄い時期にいつの間にか手に入れていたもので、不思議なことにその全ての部分を展開することが出来ないのだ。

どこにも細工は仕掛けられてはいないのに、開いてもせいぜい全体の六分の一程度しか広がらない。

力ずくで開こうとはしたものの、何か見えないものでがっちり止められているようで全く微動だにしなかった。

このままでは十分な風も受けることが出来ない。

どうしたものか、と思案の果てに気がついたものはその異様なまでの頑丈性だった。

この扇子、見かけは少し高級感のあるありふれたものに過ぎないのだが、異様なまでに堅牢なのだ。

試しに近場の工事現場で使用されている8トントラックに踏みつぶさせてみたところ、驚いたことに傷一つ付くことがなかった。

それ以来その携帯性と頑丈性を見込んで常に懷に忍ばせておき、いざという時に役立てている。（主にケンカの時とか）

鉄パイプが宙を舞う。

次々と飛来してくる凶器を弾き、叩き落とす。

「マツジでキリがねえ！

このまま逃げても無理な気がしてきた！！」

凶器を弾きつつ叫ぶ。

先程と打って変わって今戦っているのは俺だけだ。

慶事は少し前で悠々と走っている。

「うーん…そだね、多分このままじゃダメだ。

いつそのこと立ち止まって闘っちゃう？」

「まあ手前えはそんなことを…！！

…けど、まあ、そうかもな、確かに現状はあまりいただけない状況だし…

闘っちゃうか」

あれ？

俺何言ってるんだ？

あんまりにも体力使い過ぎて思考と言動が別離してないか？

ふと、そんなことが頭をよぎる。

「よし、じゃあその曲がり角で待ち伏せ、奇襲、て流れでOK？」

「ああ、それでいいんじゃないか…？」

慶事が目の前のＴ字路を右に曲がる。

俺もそれに追従した。

…。

今思えば、ここは少し冷静に考えるべきだった。

二対多数なんてふざけた状況で、それを撃退しようなんてことも…

このＴ字路がこの街で一二を争うほど事故率が高いということも…

少し思考を巡らせれば、ああはならなかっただろう。

最大速で曲がり角を曲がる。

そして目の前には不良共を待ち伏せている慶事が

宙を舞っていた。

「…は？」

視線を慶事より奥にずらす。

そこには、まるで標的を定めた猪の如く猛然とこちらに突進してくる…

大型トラックがあつた。

（トラッ…？

へ？慶事、弾かれ…？

つてか、ここ、一時停止…

！！！！

運転手、携帯使つてやがる…！！）

一瞬で言葉が頭に浮かんで消えて…やがてその思考は痛みによって吹き飛ばされた。

パツと、一瞬だけ視界が白く染まり、そして戻ってきた世界は上下が逆さまというユニークなものであった。

この時、最初に感じた苦痛は既になく、別の感性が頭を支配していた。

（なんだ…？

体が上手く動かない…

俺、弾かれて…？

…にしても…

これは…？

車に弾かれると、こんなにも…

”風”を感じるのか？)

そして

俺の”この世界”での意識はしばらくご無沙汰ということになる。

俗に言う”幻想入り”というやつだ。

## #1 さよなら世界（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2649o/>

---

風来将詩 ~ the another gatrang ~

2010年10月11日23時19分発行